―重慶日本語放送―（東京都市遞信局聽取）

四月十日

一、日本軍閥が滿洲を占領し特務機關として蒙古聯合自治政府を建てた、内蒙古の人々は一般の人に比し深刻な苦悶の生活をして居ることは事實である、滿洲國臣民と言ふ結構なる名前を與へられて居るが滿洲國内の蒙古人と連絡するを極度に恐れて居る、蒙古人の團結を恐れて居る、日本軍閥の滿洲占領當時獨立と言ふ甘い言葉をもつて籠絡し滿洲國の行政機構中に蒙政部を設定したが一九三七年七月の滿洲行政機構改正に際し蒙政部をなくし興安局を設けしかも其の局長には日本人を持つて來た、如何に蒙古人に對し壓迫を加へて居るかゞ明かである、この壓迫の下に於て反抗の氣運の動くこれを見逃す譯には行かない、プスプスと燻る松明がやがて炎々と天をも焦すやうに燃え上らぬ事は誰が言ひ得やう、蒙古人が何時までもおとなしく屈服せしむることは出來ぬ、滿洲の蒙古人の間に遠くない將來に於てこれが恐ろしい力となつて現れることは疑ひない、内蒙古の人々と共に相助けて鬪爭を續けて居るのである。

四月十一日

一、講演蔣介石委員長は五中全會議に於て日本軍閥失敗の理由を擧げてかう言つて居る、日本軍閥は卽戰卽決を基礎に數千里外の支那奥地に深入りし占領地域では遊擊軍や正規軍に勇敢なる抗戰を受けて大打擊を被り進むも退くも出來ぬ窮狀に陷つて居ると、全く其の通りで日本軍閥が頽勢に向つて居る證據を列擧すれば第一、兵力の不足である、蘆溝橋事件勃發當時は中國軍民を屈服しやうとしたが一年經つと基本部隊を全滅され豫備兵も繰り出して補充するの已むなきに至つた、作戰能力は低下し壯丁は體格も低下し合格する者少ないのである。青島に上陸した兵の四割は幼年兵、六割は老年兵、見張りの兵は十五、六才若しくは四十才以上の者でこの事實だけでも損害の莫大なる事を知り得る……將軍の報告によれば日本の現役は三〇萬豫備補充が三〇〇萬であるが七〇萬の死傷者を出し今日に於いては四十六ケ師を動員する處三十三ケ師だけ動員出來なかつた、四〇萬を徵集しやうとしたが二〇萬しか出來なかつた、本年二月後半に於ける戰績を見るに山西省では交戰二〇三回日本軍死者二三、二二一名捕虜五六六名、河南省では交戰四六回、死者二、〇二〇名捕虜五名、チヤハル、江蘇、山東省では交戰七五回、死者三、四九〇名捕虜一〇九名湖南湖北、江西省では交戰五六回、死者一、八七五名捕虜二八名、浙江省では交戰一六回死者二一名捕虜二名廣東省では交戰八回、死者六六八名以上の計交戰四〇四回、死者二一、三八五名捕虜七〇八名これが本年二月後半の戰績である、この儘で戰爭が永引くとすれば日本軍の損害は益々巨大となるであらう。第二に反戰の運動の擴大である、戰爭の永引くに連れて國民の反戰空氣は高まつて來て居る、之は國民の生活が困難を加へ侵略戰の前途暗憺になつたからである、この反戰空氣は暴力では壓迫することは出來ない、反戰空氣から實際行動に出づるやうになつた、日本兵の反亂、帝大教授の反戰、大阪火藥庫の火災、農民の暴動、勞働者の罷工等は之が激化を證明するものである。

日本國民は元より對支侵略戰に反對であつた、日支國民が相提携すべきを日本軍閥の爲めに無理矢理に戰爭に引張り出されたのであるからそれが當然である、中國としては反戰運動をもつと擴大せしむる必要がある、第三に日本軍破滅の證據である、軍閥內の鬩鬪、武力衝突陸海軍の不一致がある、軍艦の衝突沈沒は海軍青年將校の不滿の證據である、此等相俟つてその壞滅を早める以上を綜合するに日支戰爭の前途は日本軍閥の不利である、日本國民は自分自身の幸福のためにも日本軍閥打倒に蹶起するを中國人は心から切望する。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

◎米の參戰は確實と見らる

―伊藤公使語る―

―同盟來電―不發表

サンフランシスコ十三日皆藤特派員發

歐洲諸國巡歷の旅を終へた伊藤述史公使はニューヨーク經由、十三日朝サンフランシスコに到着した、伊藤公使は來る十五日サンペトロ出發の郵船平洋丸で歸國する豫定であるが、伊藤公使は十三日歐洲の狀勢に關し左の如く語つた。

「戰爭があるかどうか豫言は出來ぬが起るとすればポーランドあたりが發火點に成りさうに思ふ、然し今度は英佛も相當腹を決めてゐる樣だからドイツとしても愼重な態度を取るだらう米國の反獨空氣は想像以上に熾烈である歐洲大戰勃發當時より精神的にも軍事的にも準備が出來てゐるから歐洲に大動亂が起れば結局米國の參戰は不可避と思ふ、支那事變に關しては英國は今迄日本は財政的に參ると思つてゐた樣だが最近殊に財界方面では多少態度が變りつつある樣だ」